

八 速記の習い始め

兄は最初、私には速記をやらせなかつたものでした。二年も三年もかかつて書けるようになって、天才といわれるほど難しかった時代です。兄は自分で新式を創案しながら自分ではもちろん書けないし、いろいろな人に教えてみるけれども、皆上手にならないので、私には勉強の妨げになると思つてやらせなかつたのでした。

ところがある晩、兄の教室の机の引き出しの中に、中根式の基本文字や長音、拗音などを書いた印刷物があつたのです。私はそれを見てすぐ丸暗記したのです。ア列の2倍の長さがオ列、イ列の2倍の長さがエ列などということなど、そういう作り方は何にも書いていないので、そういうことは少しもわからず、そのまま丸暗記して、その晩一晩で基本文字を一分間四回も書けるようになったのです。それからその翌日、兄が教えていた生徒の中に森永義一という人がおられて、その人に国会の議事録を読んでもらつて、十分間四百字書いたのです。それからその翌日の晩、またその森永さんに議事録を読んでもらつたのです。五時頃読んでもらつたときは十分間五百四十字、七時頃読んでもらつたときは六百五十六字、八時半頃読んでもらつたときは六百九十七字書いたのです。このことは妹に出した手紙に詳しく書いています。終日練習しているのではなく、兄にわからないようにこつそりやつたのですが、わずか二晩と三日で